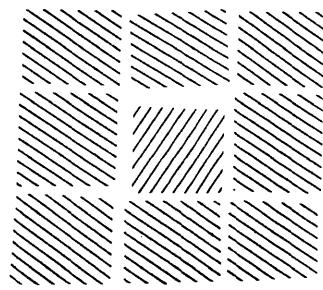


# フレーベルに学ぶもの

上野ひろ美



## 1. はじめに

フリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel) は一七八二年

四月二十一日、ドイツのチャーリングンの北麓オーベルワイズバハにて敬虔な牧師の息子として生まれた。父の仕事を通して、幼児から、苦痛や圧迫や人間関係の軋轢等、人生闘争の諸相を身近に見ながら成長すると同時に、父から受けた宗教的感化は強大なものであった。

小学校卒業後（十四才）、林務官の徒弟や土地測量等の仕事に従事するが、二十三才の時に建築技師になるべくフランクフルト・アム・マインに赴く。

その間、同学の志に燃え、イエナ大学に学び自然諸科学や建築学、測量術等を聽講する。当時のイエナ大学は、ワイマールのカール・アウグストを総長として、シラー、シェリング、ノヴァーリス等が活躍するドイツ浪漫主義の搖籃でありその中心地でもあった。そこで彼の体験した内的開眼がいかに大きかったかが想像される。

フレーベルはふとしたことからフランクフルト・アム

ある。」(荒井訳、岩波文庫)

・マインの模範学校の教師となる。この教育活動の第一歩において偉大な感化を受けたのは、ペスタロッチからであった。当時ペスタロッチの名声はヨーロッパ教育界を風靡し、その門下生であるグルーナー校長の指導の下に、この模範学校もペスタロッチ主義の教育・教授を行なつてからである。その後フレーベルは自らペスタロッチの許へ行き、親しく指導を受け、ペスタロッチ学徒として生涯を送ることになる。

## 二、教育の目的

フレーベルの主著『人間の教育』の冒頭である

「すべてのものの中に、永遠の法則が、宿り、働き、かつ支配している。この法則は、外なるもの、すな

わち自然のなかにも、内なるもの、すなわち精神のなかにも、自然と精神を統一するもの、すなわち生命のなかにも、つねに同様に明瞭に、かつ判明に現われてきたし、またげんに現われている。……この統一者が、神で

(一)自己活動の原理——フレーベルの教育原理は受動的・追随的教育であるといわれる。たとえば、それは、「教育、教授、および教訓は、根源的に、またその第一

フレーベルの世界観や人生觀はすべて神的統一に基礎をもつていて。但しこの場合の神は宗教的であるのみならず、哲学的であり、自然科学の絶対法則でもある。彼は宇宙を一大有機体とみなし、鉱物、植物、人間、天体等のすべてに一貫する統一を見る。この一貫した統一のもとに万物が存在し、万物には共通のものすなわち神性が秘められているという。しかもこの神性が万物の本性を形成しており、この本性を表現し、啓示し、発展させることが万物の使命である。教育の目的はまさにこのようないか。

では、そのような道と手段とはいかなる原理によらねばならないか。

## 三、幼児教育原理

フレーベルのなかにも、内なるもの、すなわち精神のなかにも、自然と精神を統一するもの、すなわち生命のなかにも、つねに同様に明瞭に、かつ判明に現われてきたし、またげんに現われている。……この統一者が、神で

の根本特徴において、どうしても受動的、追随的（たんに防禦的、保護的）であるべきで、決して命令的、規定的、干渉的であってはならない」（前掲書）というフレーベルの叙述に基づいて主張される。

しかしながら、それは必ずしも、今日わが国でいわれるところの児童中心主義的な自由放任教育に尽きるものではないと思われる。フレーベルに学ばんとする我々は、その点を慎重に考慮しなければならない。

第一に、フレーベルによれば、いっさいの事物は神性の表現であり、その神性を個人の生活に実現させることが教育の目的である。この神性を表現させる為には、生命の内部からの発達を自由に行なわせなければならぬ。ここで彼は「発達」概念を教育に適用する。そしてこの「発達」は、子ども自身の衝動ないし意欲に基づいて生じる諸活動（＝自己活動）の中で実現されるといふ。

「発達」及び「自己活動」の概念を教育に適用したことは彼の歴史的業績である。この主張は、当時の学校の

厳格な訓練と伝統的な形式主義に対する批判として大きな意味をもつていた。すなわち、あたかも子どもを「欲するままにこねあげることの出来る蠟か粘土の塊」とみていた、当時の「粘土細工」的教育観に対する痛烈な批判が彼の主眼とするところであったのである。それに対して彼は、植物の生長する姿に人間発達の象徴をみ、生命の世話と保護をなす「栽培」に教育の働きをなぞらえるのである。

「受動的教育」が唱えられたこのような背景を考える時、それを単なる消極教育に解するにどまらず、子どもの自主的活動および自己教育の為の主体的努力を促す教育的条件のあり方を、フレーベルがどのように把握していたかという視点から、改めて検討する必要があると思われる。

第二に、フレーベルは教育によって子どもを「方向づけ」ることを意図していた。周知のように彼の象徴主義を具現化した遊具は「恩物」と呼ばれる。彼の恩物論には、恩物の体系を觀念論哲学から導き出したところの、

たとえば球を遊具として与えることによって「宇宙の統一」を把握させる、といった理論づけがなされている。

フレーベルによれば、幼児期において、「合法則的かつ必然的な発達過程」に恣意的無法則的な干渉が加えられることによって、根源的には「良い」はずの人間の諸能力、諸性質の発達がゆがめられるのである。しかるにこのゆがみを生ぜしめることがなく、「宇宙の統一」「生の合

一」へと子どもを導くところに、彼のいう「受動的教育」の真義が存在するのである。すなわちここにおいてもすぐれて、世界の本質、人間の本質へと子どもを「方向づけ」ることを可能にするような、自己活動を呼び出す教育的条件のあり方が求められているのである。

(2) 共同感情育成論——フレーベルは共同感情 (Gemeingefühl) の育成を重視する。この感情はまず母と子の間で形成される。最初の表われは母と交わす子の微笑である。そしてこの感情は子の成長発達と共にやがて父、兄姉、周囲の大人、遊び仲間へと拡大されていく。したがつてフレーベルは、共同感情を育成する立場から、幼

児期にあっては創造的な遊びと並んで集団的な遊びを、少年期にあっては創造的な労働と並んで集団的な共同労働を重視している。

共同感情は人と人との和合、人と自然との調和、人と神との一体感をつくりだす。それはフレーベルにとって、いさざいの人間的、社会的関係の基礎をなすものである。

このように集団活動を遊びや学習に導入したことは、子どもたちの園生活や学校生活において望ましい社会関係がいかに重要な意味をもつものであるかということを、我々に教えている。

(3)遊びと作業の理論——フレーベルは人間を「創造的存在 (Schaffendes Wesen)」と見え、それにふさわしい教育がなされることを要求する。彼は子どもに「活動衝動 (Tätigkeitstrieb)」のあることを認め、この衝動を充足し育てる」とを通して、「勤労の為の教育」を行なおうとする。その為に、乳児期においては感官および四肢の活動を奨励し、幼児期においては遊びの教育的意義

を強調して遊びを奨励する。

#### 四、おわりに

「あらゆる善の源泉は、遊戯のなかにあるし、また遊戯から生じてくる。力いっぱいに、また自発的に、黙々と、忍耐づよく、身体が疲れきるまで根気よく遊ぶ子どもは、また必ずや逞しい、寡黙な、忍耐づよい、他人の幸福と自分の幸福のために、献身的に尽すような人間になるであろう。この時期の子どもの生命の最も美しい現われは、遊戯中の子どもではなかろうか。」（前掲書）

こうした観点に立って、フレーベルは子どもの生來の本性を知的、感情的、道徳的に発達させるものとして、図画、粘土細工、唱歌、ダンス、積木、ボール遊び等を教育的活動として取り上げる。そして、なかでも、子どもの本性を外界に自己表現するに理想的な遊具として「恩物 (Gabe)」を考案したのである。

その後活動衝動は形成衝動へ発達し、労働がひき起これ、学習と並んで労働が少年期の生活の重要な一面をなすようになる。いわば、遊びが教育の出発点となるのに対して、作業＝労働はその帰着点ともいえよう。

フレーベルの幼児教育構想のさらなる特徴として、幼稚園を、当時すでに国民教育制度の一貫として位置づけていたこと、めざすべき幼児教育を担う保育者養成に力を入れたこと、等が指摘されよう。

フレーベル生誕二〇〇〇年を迎えた一九八二年、フレーベルの生地では彼の理念を今日に引き継ぐ幼稚園が新たに増設され、生家やカイルハウ学園等の関係諸施設には修復が施され、また、イエナ大学を中心に生誕二〇〇〇年行事の開催へ向けて準備が進められた。

すぐれた古典的教育者、人道主義者として今なお敬愛されてやまないフレーベルの教育思想から、幼児教育における今日的課題に対する示唆として、我々の学ぶところいつそう大であることを痛感している。（山口大学）